

# エドワード・ジェンナーをめぐる謎

## 2

加藤 四郎

大阪大学微生物病研究所

### わが国で伝えられているジェンナーのわが子牛痘接種実験物語りについて(続)

#### c. 梅田敏郎氏の研究

梅田敏郎氏は、昭和30年代には、大阪朝日新聞社の科学記者として活躍するとともに、当時自らもスタンレー著の「ウイルス」を翻訳するなどウイルス学を中心とした科学に深い関心と広い知識を持っておられた。また社会派記者でもあり、種痘禍の問題などにも鋭い論文を発表しておられた。おそらくご本人の興味の上に取材もかねてと思われるが、微研にもしばしば訪ねてこられ、私の所属していた釜洞研究室（感染病理学部門、当時部門長は釜洞醇太郎教授、後阪大総長になられた、故人）にもよく顔を出しておられた。ある時釜洞先生からジェンナーの最初の被験者がわが子ではないということを知り、社会派記者として「何故日本人だけが誤った道徳物語りを教えられてきたのか」に取組み、みごとにそれを解明された。

先ず少なくとも当時「ジェンナーが最初にわが子に牛痘接種した」とする物語り（以下「わが子物語り」と略す）が、日本人の通念になっていたのは、戦前の小学校の教科書、修身にそのことが記載されていたからである。

梅田氏は先ず明治以降における教科書の編纂が5期に分けられること（第1期：明治37年4月から、第2期：明治43年から、第3期：大正7年から、第4期：昭和9年から、第5期：昭和16年から）、そして終始ジェンナー伝がとりあげられているが、第1期より第3期までは「志を堅くせよ」という題がつけられており、第4期ではその題は「発明」となり、第5期では「種痘」として紹介されていることなどを明らかにされた。このうち「わが子」と明記されているのは第2期以降のもので(図1)、第1期の教科書には「わが子」

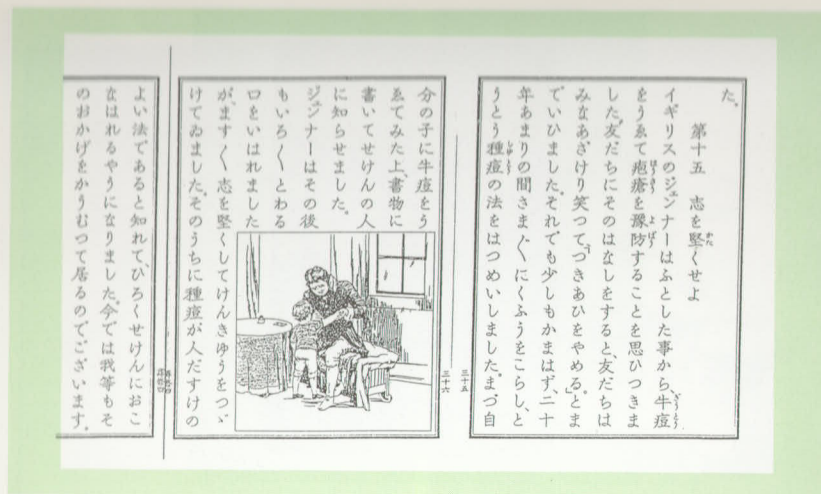


図1. 尋常小学修身書巻4（大正9年発行）にあるジェンナーの章. この第3期の教科書は、大正7年より昭和8年に至る16年間という最も長く教科書として用いられてきたもので、「わが子物語り」が述べられている。



図2. 尋常小学修身書第4学年(明治38年発行)(国立教育研究所所蔵)にあるジェンナーの章. 第1期(明治37年より明治42年まで)の修身書で、この章には「わが子」の文字はない. なお第1期の教科書にのみジェンナーが、わが子に牛痘を試種している大理石像の図が載せられている。

の文字はない。私はたまたま第1期の教科書に接することができたが、確かに「わが子」の記載はない(図2)。ただ第2期以降の教科書と異なり、本誌前号に紹介した東京医事新誌に載せられているモンテベルデ作の「ジェンナー氏其子息ニ牛痘試種ノ図」の大理石像の版画を写したと思われるさし絵が載せられている。すなわち少なくとも第1期の7年間、このさし絵が日本人にとってなじみの深いものとなっていたことになる。更に第1期の教師用教科書の解説には「先づ三たび己が子に種え試み」とあり、教師が「わが子物語り」を教室で教えていたことになる。





図3. 種痘法発明者、善那氏頌徳之記  
(明治29年発行)(藤野恒三郎先生所蔵)

梅田氏は更に第2期より第5期までの教師用教科書に、備考としてこの例話の由来書があげられていることを見出した。それは善那氏種痘発明100年記念会右代表者東京市神田区西今川町7番地、岐阜県士族江馬春熙が編纂兼発行者となり、「種痘法発明者善那氏頌徳之記附日本種痘の沿革」(以下「頌徳之記」と略す)と題して明治29年に出版された書となっている(図3)。

この書は、最初にジェンナーの肖像(図4)、次いで上述の「エドワード・ジェンナー氏其児ニ牛痘ヲ試種スルノ図」(図5)を載せ、1頁より7頁まで「種痘法発明者善那氏頌徳の記」、そして8頁より「恵度窳度、善那氏牛痘発明の由来」(以下「由来」と略す)を収録し、29頁より附として「日本種痘の沿革」を収めている。問題の文章はこの「由来」にある。

以下にその文章を紹介する。

「乃ち今より指僕ふれば正に一百年に相當する其歳(千七百九十六年(我寛政八年))五月十四日に善那は「サラ、ネルメス」と云ふ牛の乳を搾り取る一人の女の手に出でし牛痘より漿液を採りて其名を「ゼームス、フェップス」と呼びし八歳許なる小童の手腕に種え接しがこれぞ善那が多年の苦心を以て始めて人體に種痘せし始めとこそ知られける但し此「ゼームス、フェップス」と云へる小童は果して誰れの子なりしや精しく載せし書物を見ざれども特り「スマイル」と云へる人の著書の中に善那は先づ其種痘を我子に試み始めしとあり左れば「ゼームス、フェップス」は果して我子にてありしならんか前代未聞の工夫を以て故と賤しき獸類なる牛の疱瘡の漿液を採りて換ひ様もなき人の身體に移して之を試さんとて牛の疱瘡を受けし者は何如なる患を身に起し如何なる様に變ずるやは當時の人の知る由なれば誰とて我最愛の兒女を與へて善那が始めての試験に許す者あらん」

思えばこの下線を付した文章はまことに奇妙な文意と言わざるを得ない。「ゼームス、フ

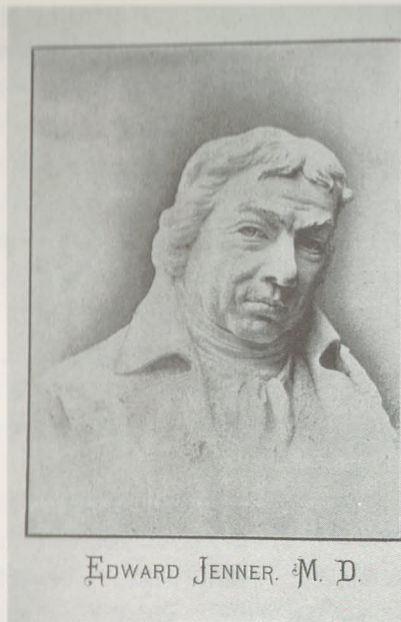


図4. 図3の頌徳之記のジェンナーの肖像画



図5. 図3の頌徳之記のジェンナーの大理石像の図、本誌前号に紹介したものと同一であり、転載したとみられる。

ェップス」を最初の被験者の名として正しく紹介しておきながら、「スマイル」の著者に「善那は先づ其種痘を我子に試み始めし」とあるので、「左ればゼームス、フェップスは果して我子にてありしならんか」と、ためらいながらも飛躍している。こうしていったん「わが子」にしてしまうと、「わが子を実験台にして」という美談に発展することは充分うなづけることである。

更に梅田氏は、ここで引用された「スマイル」の著書なるものをしらべ、それがサミュエル・スマイルズ(Samuel Smiles)の著書“SELF-HELP”を翻訳した「西国立志編 原名自助論」(中村正直訳)のジェンナーの章であることを明らかにされた。

この章には、「日納爾牛痘ヲ種ル事ノ益ヲ確然トシテ疑ガハザルニ至リケレバ先己ガ子ニ牛痘ヲ種ヘハ試ロミ云々」と明快に書かれている。梅田氏は、この文章こそわが国の人々のジェンナー観の原典であったと結論された。

#### d. 「西国立志編」とその原書スマイルズの“SELF-HELP”におけるジェンナー伝の対比

私は中村正直訳の西国立志編のジェンナーの章とその原書であるスマイルズの“SELF-HELP”の記載とを対比するため、両者につき検討する機会を得た。

幸い藤野恒三郎先生(現大阪大学名誉教授)が両者とも所蔵しておられ、快くお見せいただいた。私がお借りした西国立志編は、第1冊と第3冊であるが、第1冊(図6)の表紙の裏頁には「明治四年辛未七月新刻、西国立志編原名 自助論 駿河静岡中村敬太郎訳 木平謙一郎板」とあり、次の頁に「官許明治庚午初冬新刻 中村正直訳、SELF HELP By Samuel Smiles, Translated by K. Nakamura, 英国斯邁爾斯著西国立志編原名自助論一千



八百六十七年倫敦出版、駿河国静岡藩本平謙一郎藏版」とあるので、これが“SELF-HELP”を翻訳したものであること、庚午すなわち明治3年の初冬に官許となり、その翌年明治4年に出版されたものであることなどがわかった。事実、平凡社「世界大百科事典」(一九六七年初版第4刷発行)によると、「西国立志編」の初版は、1871年(明治4年)となっている。

中村正直について、大阪大学梅溪昇教授(現名誉教授)より、「正直」は、セイチョクと発音すべきであるという説のあること(多くの人名辞典はマサナオとなっている)と共に、「中村正直は幼名釧太郎、のち敬輔と改名す。諱は正直、号は敬宇、静岡に在る間、一時敬太郎と称す(石井民司『自助的人物之典型中村正直伝』明治40年刊による)」と教えていただいた。すなわち中村敬太郎が正直と同一人物であることが確認できた。第1冊中の「自助論目録」には、第1編に始まり第13編に及び、通計324章の題がおさめられている。ジェンナーに関するものは、第5編「幫助即ち機会ヲ論ズ及ビ學術ヲ勉修スルコトヲ論ズ」の第31章として、「日納爾<sup>ジェンネル</sup>牛痘ヲ發明セシ事」と題されたものである。そして第3冊にその第31章が収められている。

一方、私が最初に手にした藤野先生ご所蔵のスマイルズ著の“SELF-HELP”の方は、1910年版となっているので、翻訳の原書(1867年)よりはかなり新しい版ということになる(図7)。“Encyclopaedia Britannica”1962年版によると、“SELF-HELP”の初版発行が1859年(安政6年)となっている。しかもスマイルズは、1904年(明治37年)に死亡しているのので、私の手にした版は、彼の没後の版である。

さて、ジェンナーの事項は、Chapter V の163頁より165頁に記されているが、「西国立志編」のように章として、小分けはしていない。ジェンナーの事項について、一般的に原書の英文と訳文を対比すると、ほぼ直訳に近いものであることがわかった。問題の個所の英文は、その前にジェンナーの師 John Hunter の有名な教訓の言葉もあるので、その部分を紹介する。

In London he was so fortunate as to study under John Hunter, to whom he communicated his views. The advice of the anatomist was thoroughly characteristic: “Don't think, but try, be patient, be accurate.” Jenner's courage was supported by the advice, which conveyed to him the true art of philosophical investigation. He went back to the country to practise his profession and make observations and experiments, which he continued to pursue for a period of twenty years.

His faith in his discovery was so implicit that he vaccinated his own son on three several occasions. At length he published his views …

次にこれに対応する「西国立志編」の訳文を記載する。

「其後倫敦ニ至リ幸ニ<sup>ジョンハンター</sup>戎翰他ノ弟子トナルコトヲ得テ、ソノ牛痘ノ説ヲ語リケレバ、コノ解剖ノ大家ノ言、大ニ尋常ノ外ニ踰エタリ。曰ク徒ニ思フコトナクシテ、実ニコレヲ試ミヨ、久シキニ耐エルベシ、又精細ナルコトヲ要ストゾ答ヘケル。日納爾コレニ由リテ、勇氣益々奮ヒ、遂ニコノ事ヲ講求センガ為ニ、故郷ニ帰リ、二十年ノ間経験ノ功ヲ積メリ、既ニシテ日納爾牛痘ヲ種ルコトノ益ヲ確然トシテ疑ガハザルニ至リケレバ、先ヅ己レガ子

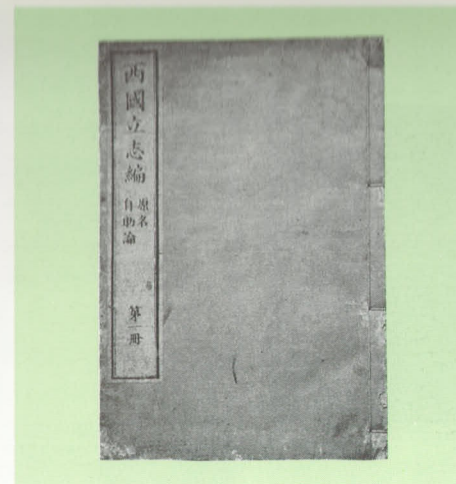


図6. 西国立志編(明治4年発行)  
(藤野恒三郎先生所蔵)

ニ牛痘ヲ種試ロミ、其ノ後書ヲ著ハシテ、云々。」

さて、問題の文章は、下線を付した部分であるが、この原書の英文には「先ず」に相当する語もないし、文意としても、最初にしたという表現とは思えない。むしろ、わが子にすら行なった、ともとれる文章である。

先に述べたように、中村正直が翻訳した“SELF-HELP”は、その1867年版であるので、私の最初に手にした1910年版と内容が異なっている可能性がある。先ず、国会図書館に問い合わせ、1883年版および1866年版(これは“SELF-HELP”の初版とみなされる1859年版を Alfred Talandier がフランス語に訳したもの)のあることがわかり、これらについて検討した。少なくとも問題の個所については、前者は全く同一の文章であり、後者(フランス語訳)も、ほとんど1910年版の文章の直訳とみなされる同意義のものであった。更に、英国 Bristol 大学医学部図書館蔵の1864年版のコピーも入手することができ、ジェンナーに関する記載が Chapt. IV (1910年版は Chapt. V)に入っているという差こそあったが、同一の文章であることが確認できた。

すなわち、1867年版こそ入手できなかったが、フランス語訳のもととなった1859年版にはじまり、1864年版、1883年版を経て1910年版に至るまで、問題の個所については、少くとも英文は同一であり、フランス語訳についても「先ず」に相当する文字も文意も見出されなかった。

スマイルズのいう his own son に対する接種実験は、誰に対するいずれの実験を指すのであろうか。スマイルズは、この後でジェンナーの論文“An Inquiry…”(1798年初版出版)の内容を紹介しているが、スマイルズは医師でもあり、当然この論文を読んだと思われる。

ジェンナーの論文の中には第22例として、1798年4月21日に次男ロバート(Robert)11カ月に牛痘材料を接種したことが載っているのので、スマイルズのいう his own son とは口



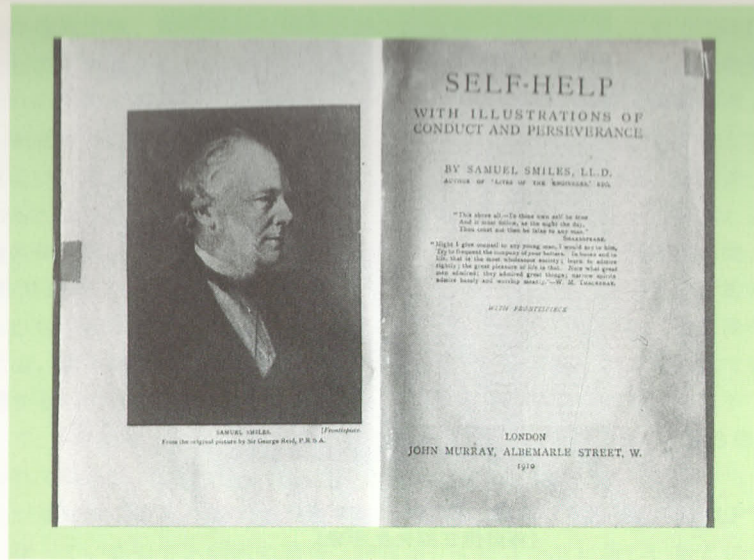


図 7. Samuel Smiles 著 “SELF-HELP” (1910年) 発行  
(藤野恒三郎先生所蔵)

パートのことをいうのであろうか。しかしロパートについては、この日の接種のことしか述べられていないし、しかもつかなくたと記されている。長男のエドワードに、いわゆる豚痘材料を接種したことは、ジェンナー自身の論文には触れていないが、すでに1838年発行のバロンのジェンナー伝には載っている。しかし、これには明瞭に swinepox となっているし、その材料は一回しか接種していない。結局 Smiles の記した “his own son” と “on three several occasions” がいずれの実験を意味するのか、また、その由来が何かは、今となっては謎としか言い難い。

以上「西国立志編」とその原書 “SELF-HELP” におけるジェンナーの牛痘種痘実験に関する文章を対比し、中村正直が翻訳に際して原書にない「先づ」を入れたことがわかった。これは中村正直の筆の走りとも言うべきものであろうが、それを引用して「ジェンナーは先ずわが子に試み、その安全性を確めて」といった道徳譚にまで発展させたのは、先項で述べた「ジェンナーの種痘法発明百年記念」として明治29年に発刊された小冊子「種痘法発明者善那氏頌徳之記」であるとみなすのが妥当であろう。この著者はおそらく医師であり、本誌18巻1号に紹介した明治26年発行の東京医事新誌の「ジェンナー氏其子息ニ牛痘試種ノ図」および上記の頌徳之記にある同じ図の口絵を見ていたと思われるので、この彫像も「わが子論」に発展させる十分な背景をなしていたと思われる。

それにしても、スマイルズが牛痘接種実験のくだりに、わざわざジェンナーの息子のことを引用したことは、まことにまぎらわしいことではあった。

なお、中村正直の「西国立志編」は、「明治の聖書」ともいわれ、明治、大正を通じてのベストセラーとして、当時のわが国の青少年の独立心と向学心の涵養に著しく貢献したものであり、その功績を高く評価すべきことには変わりはない。

#### e. 明治36年10月16日発行尋常小学修身書第4学年教師用におけるジェンナー物語りの解説について

梅田氏により示されたように、わが国の国定教科書の第1期（明治37年4月から使用）の修身書（第4学年）には、「こころざしをかたくせよ」と目次に記され、第11章としてジェンナーの牛痘種痘法の発明物語りが紹介されているが、「わが子」という文字はない。しかし第1期の修身書第4学年教師用には、「先づ三たび己が子に種痘試み」とあることが述べられている。

私は、明治36年10月16日発行の尋常小学校修身書第4学年教師用（国立教育研究所蔵）36頁の「第十一志を堅くせよ」と題するジェンナー物語りの「説話要領」を読む機会を得た。この解説文には第2期以降の教師用教科書のように由来書は述べられていない。しかし私を驚かせたことは、この文の主要部分が、スマイルズの “SELF-HELP” の文章の翻訳であり、しかも、西国立志編とは全く異なった表現で訳されていることであった。前項で紹介した “SELF-HELP” の個所と対応する文章は以下の如くである。

されどジェンナーはその志を改めず、暫くしてロンドンにいたり、ジョン、ハンターといふ醫者の弟子となれり。あるときジェンナーその師に向ひ、己が志を語りてその意見を尋ねしに、ハンターは「ただ思ふのみにては益なし。これを實地に試みよ。またよく忍耐して精細に研究せよ」と教へて、これを勵したり。ジェンナーは師の奨励を受けて、益その志を堅くし、再び郷里に歸りて、これを研究すること二十年の長きに及べり。その間、種種の経験を積み、遂に牛痘を種ゑて、疱瘡を防ぎ得ることを確信して疑はざるに至りければ、先づ三たび己が子に種痘試み、その後、書を著わして、牛痘を種ゑたる人は疱瘡に感染することなしとの説をのべて、その実験の結果を報告せり、これ當初研究を始めしより二十三年の後なりき。

すなわち、著者が西国立志編の訳文（d 項で紹介した）を更に表現を変えて記載したというよりは、直接 “SELF-HELP” の英文を翻訳したとみなすのが妥当であろう。特に下線を付した文章の中に「先づ三たび己が子に種痘試み」と、西国立志編には記載のない「三たび」があることもそれを裏付けるものである。とすれば、英文にない「先づ」がここでも挿入されたことになる。後述するように、モンテベルテの作像の動機もどうやら “SELF-HELP” を読み、「わが子を実験台にした」と解釈して感動したことになる。

やはり “SELF-HELP” の英文は、当時のいくつかの背景はあったにせよ、中村正直だけでなく非英語国民にとって「先づ己が子に」と解釈し易い表現と言えるのかも知れない。

(続く)

